

| 学生海外調査研究                             |                                            |
|--------------------------------------|--------------------------------------------|
| 日本統治期台湾に設けられた高等女学校に関する資料調査－台湾東部を中心に－ |                                            |
| 氏名 滝澤 佳奈枝                            | 人間発達科学専攻                                   |
| 期間                                   | 2016 年 10 月 30 日～2016 年 11 月 10 日          |
| 場所                                   | 台湾（花蓮・宜蘭・台北）                               |
| 施設                                   | 国立花蓮女子高級中学、国立蘭陽女子高級中学、台北市立第一女子高級中学、国立台湾図書館 |

## 内容報告

### 1. 本調査の目的と得られた結果

#### 1.1 本調査の目的

1945 年 8 月 15 日現在、台湾全土に公立の高等女学校が 20 校設けられていた。その内 18 校が今日の高級中学や女子高級中学へと引き継がれている<sup>1</sup>。これまでの日本統治期台湾の高等女学校に関する先行研究は、台北や台南といった大都市を中心に行われており、地方の高等女学校（特に台湾東部）については明らかにされていない部分が多い<sup>2</sup>。その理由の一つとして考えられることは、戦前の高等女学校に関する資料がどの程度戦後に引き継がれ、保存収集されているかが把握できていない点にあると思われる。そのため、本調査では、地方に設けられた高等女学校の中でも特に台湾東部に設けられた高等女学校の実態解明を行うための最初の取り組みとして、国立花蓮女子高級中学（元花蓮港庁花蓮港高等女学校、以下花蓮港高女と略記）、国立蘭陽女子高級中学（元台北州立蘭陽高等女学校、以下蘭陽高女と略記）の 2 校及び台北市内の台北市立第一女子高級中学（元台北州立台北第一高等女学校、以下台北第一高女と略記）を訪問し、戦前の高等女学校に関する資料がどの程度引き継がれているのか、また保存されている資料はどのようなものであるのかを確認することを目的とする。戦後引き継がれた資料の所在を確認することは、日本統治期台湾の高等女学校研究を進めていく上で重要な手がかりを示してくれるものであると考える。

本調査で明らかにしようとすることは、次の二点である。第一点目は、調査目的とも関係するが、訪問先の学校に所蔵されている高等女学校に関する資料の有無及び保管状況を確認すること。また、どのような資料が引き継がれているのかという点についても確認を行う。第二点目は、台湾東部に設けられた高等女学校の特色（例えば、立地、生徒数の民族差、教育内容など）を明らかにすることである。

本調査の特色及び独創的な点としては、これまでに行われてきた台湾の高等女学校研究が大都市を中心としたものであったこと、そして台湾西部を中心にしたものであったことに対して、台湾東部に設けられた地方の高等女学校について明らかにしようとする点にある。訪問した花蓮は、先住民族の多い地域でもあり、早い段階から日本人の移民村が設けられた地域でもある。観光資源に関する研究は進みつつあるが、教育に関する研究は決して多いとは言えない。そのため、本調査を通して、台湾東部に設けられた高等女学校で行われていた女子教育の一端を明らかにすることは、意義あることであると考えられる。

#### 1.2 得られた結果

##### 1.2.1 花蓮港庁花蓮港高等女学校（現国立花蓮女子高級中学、2016 年 11 月 2 日・3 日訪問）

花蓮港高女は、1927（昭和 2）年 4 月に台湾東部の花蓮港庁花蓮港郡（現花蓮市）設けられ、今日の国立花蓮女子高級中学（以下、花蓮女中と略記）に引き継がれている<sup>3</sup>。現在使用されている花蓮駅は、日本統治期の旧花蓮港駅の場所とは異なっている。当時の高等女学生達が利用した旧花蓮港駅は現存しないが、近くに設けられていた台湾総督府鉄道部花蓮港出張所（以下、旧花蓮港出張所）は現在「花蓮鉄道文化園區」として開放されており、所長室や食堂等の建物が保存されており、日本統治期の花蓮港駅や鉄道に関する資料などが展示されている<sup>4</sup>。花蓮港出張所から学校までは徒歩 20 分程度で到着するため、花蓮港出張所の先に位置した旧花蓮港駅から学校までは約 30 分程度かかったのではないかと推測される。校舎は、小高い丘に建てられているため、上り下りの坂道が通学路にな

っていたことがうかがえた。

正門を入ると、正面には日本統治期に植樹された木が残されている。校内には、日本人の卒業生から贈られたという石碑があり、今でも交流が続けられている様子がうかがえた。正門前の道を隔てた反対側には高等女学校時代の校長が住んでいた官舎が残されており、管理は花蓮女中が行っているということであった。これまでも旧高等女学校を引き継いだ学校を訪問し本調査と同様のことを行ってきたが、現存する校長官舎を目にしたのは今回が初めての事であった。官舎の玄関と学校の正門が向き合う形になっている。官舎内は、当時の佇まいがそのまま保存されていた。訪問した日も学校関係者の職員が掃除をするなどして手入れを行っていた。平屋の一軒家であるが、中に入ると外見よりも広く感じられる。裏庭は、美崙溪に面しており、対岸には「将軍府」（元中村大佐邸宅、以下「」省略）と称される日本家屋等が 10 軒ほど保存されていた。将軍府と一緒に保存されていた日本家屋は、以前訪問した虎尾に残されていた大日本製糖株式会社の社宅と似た作りになっていた。入口には防空壕も残されていた。また、「松園別館」（元花蓮港庁兵事部事務所、以下「」省略）と称される場所がやはり対岸の丘の上に設けられている。この「松園別館」は、特攻隊員が出征前に宿泊した施設でもある。将軍府も松園別館も今日では観光施設になっているが、防空壕や防空扉が日本統治期の歴史を現在にも伝えている。日本軍にとって、将軍府も松園別館も重要な施設であった。このような施設が徒歩圏内にある場所に花蓮港高女は設けられていたのである。

学校の歴史を展示している「校史室」（以下「」省略）の入っている建物の廊下からは、太平洋が一望できる。校史室に展示されている資料については、そのほとんどが戦後の物であり、記念誌類についても高等女学校時代の物は展示されていなかった。校史室に展示されている物の中で、花蓮港高女の方が確認できたのは、学校周辺の地形の模型とその模型を載せている机である。模型は二つあり、それぞれに「日治時期模型台 美崙至寿豊段溪流流域」と「日治時期模型台 宜蘭蘇澳至花蓮和平沿海地区」と中国語で説明書きが付されていた。作成された具体的な年代については不明である。机には、「庁地方費立花蓮高等女学校」と刻印された金物の当時のプレートが付けられていた。花蓮港高女に関する資料は別の箇所に保存されているようであったが、具体的にどのような資料が引き継がれ保存されているのか詳細を知ることができなかった。デジタル化された花蓮港高女時代の写真や資料の一部を見せてもらうことができたが、個人情報等の関係から実物を見せてもらうことはできなかった。写真の出典が不明であるため、いつ頃撮影されたのか確認することもできなかった。デジタル化された資料の一部から、卒業生の人数を把握することが可能である。名前のみが記された資料であるため、在籍していた生徒の民族による別を判断することは困難である。なぜなら、日本名に改めている台湾人生徒が在籍している可能性があるからである。校史室には、戦後の資料が主として展示されていたが、先に触れた校長の官舎には日本統治期の公学校で使用されていた教科書や当時読まれていた教育に関する日本語の書籍などが数冊展示されていた。いずれも卒業生や卒業生の家族からの寄贈とのことであった。これらの書籍から、日本統治期の台湾で教育に関わるどのような書籍が読まれていたのか、また流通していたのかその一端をうかがい知ることができる。これらの書籍の所在を確認できたことは、日本統治期の台湾で行われていた教育について考えていく上で重要な手がかりとなる資料類であるといえる。

将軍府の近くには、花蓮県花蓮市明禮国民小学があったため、事前に連絡は取っていなかったが訪問を試みた。その理由は、この学校の創立が 1897（明治 30）年に設けられた台東国語伝習所奇萊分教場にまで遡ることができるからである。1897 年といえば、日本統治が始まった 2 年後のことである。1905（明治 38）年に花蓮港公学校に改称し現在の場所に校舎を構えることになった。1939（昭和 14）年には明治公学校と改称した。明治公学校には分教場がいくつかあり、それぞれの分教場も今日の国民小学へと引き継がれているようである。明治公学校は、1941（昭和 16）年には明治国民学校へと改称している<sup>5</sup>。突然の訪問にも関わらず、校長先生が学校の歴史等について説明をしてくださった。その説明によると、美崙溪沿いに設けられた公学校であったため何度も水害にあい、100 年以上の歴史を持っていても日本統治期の資料類が残されていないとのことであった。正門から校舎へと続く階段は、日本統治期ののものであるとのことであった。

### 1.2.2 台北州立蘭陽女子高級中学（現国立蘭陽女子高級中学、2016 年 11 月 4 日訪問）

蘭陽高女は、1938（昭和 13）年 4 月に台湾北東部の台北州宜蘭市（現宜蘭市）に設けられ、今日の国立蘭陽女子高級中学に引き継がれている<sup>6</sup>。台北州に設けられた高等女学校は、1945 年 8 月現在、台北第一高等女学校、台北第二高等女学校、台北第三高等女学校、台北第四高等女学校、基隆高等女学校、そして蘭陽高等女学校の 6 校あった。6 校とも台北州の設立ではあるが、基隆高女と蘭陽高女については台北市内に設けられた高等女学校ではないため、地方に設けられた高等女学校として位置づけることができよう。蘭陽高女の校舎は既に建て替えられているが、正門は蘭陽高女時代の物が今日でも使用されている。

訪問時、校史室が新築中ということもあり旧校史室を見学させていただいた。資料の多くが既に他の場所に移されているようで、実際にどのような資料が展示されていたのか把握することはできなかった。残されていた展示資料の中に、日本人卒業生が戦後に寄贈した日本人形等が展示されていた。今でも高等女学校時代の卒業生と学校との交流が継続されている様子がうかがえた。また、日本統治期に使用されていた電話も展示されていた。これまで訪問した学校では、高等女学校時代に使用していた机や椅子、ミシンなどが展示されていることがあったが、電話が残されているのは興味深かった。閲覧資料については、事前に学校側に問い合わせをしていたことから、いくつか貴重な資料を実際に手に取り見せていただくことができた。本来、資料類は校史室で閲覧すべきものと思われるが、当日、旧校史室が他の行事で使用当中であったことから、別室にて閲覧をおこなうことになった。閲覧の時間は、10:00～17:00である。資料の閲覧に際しては、校長並びに資料類を管理している担当の先生に撮影並びに複写の許可を得てから行った。そして、個人情報についても慎重に扱うようにとの説明を受け、個人情報に配慮しながらどのような形で写真撮影を行えばよいか相談しながら作業を進めた。結論としては、個人名が特定できないように、名前を付箋で隠すなどして写真撮影を行った。また、資料類が国立蘭陽女子高級中学所蔵の物であることを示すために、校名を記した紙片を資料の上に載せて写真撮影を行った。閲覧並びに写真撮影は、全て学校の先生立ち会いの下で行い、複写を行う場合も1点ずつ許可を得てから行った。更に、各資料をどのような形で論文に使用するのか、どの部分を使用するのかといった具体的な事柄についても相談し話し合いを行った。限られた時間の中で全ての資料を撮影、複写することは不可能であったが、用意してくださっていた資料類については一通り目を通し、どのような資料類が戦後に引き継がれているのか、その一部を確認することができた。蘭陽高女については、今後も継続して資料調査を行っていきたいと考えている。

### 1.2.3 台北州立台北第一高等女学校（現台北市立第一女子高級中学、2016年11月9日訪問）

台北第一高女（現台北市立第一女子高級中学、以下北一女と略記）は、1904（明治37）年に日本人女子生徒のために設けられた台湾総督府国語学校第三附属学校に端を発し、1909（明治42）年に台湾総督府高等女学校として独立した<sup>7</sup>。日本統治期の台湾における高等女学校としては、最も早くに設けられた学校といえる。台湾総督府（現台湾総統府）の斜向かいに設けられており、学校の並びには、台北市立大学（旧台湾総督府国語学校）がある。近くには、司法院（旧台北地方法院・高等法院）、台北迎賓館（旧台湾総督府官邸）、台湾大学医学部附設医院旧館（旧台北帝国大学医学部附属医院）、立法院（元台北州立台北第二高等女学校跡地）などが徒歩圏内にあることから、台北市内の中でも特に政治や教育の中心に近い場所に校舎が設けられていたことがうかがえる。北一女には、2015年11月にも訪問したが、その時には校史室が工事中ということもあり資料については一切見ることができなかった。そのため、今回改めて訪問することとした。新設された校舎の1階に校史室が設けられており、台北第一高女時代から今日の北一女に至るまでの様々な資料が展示されていた。中でも目を引いたのは、高等女学校の家事科の授業で使用されていた食器一式が展示されていたことである。これまで訪問した学校では、生徒が制作した刺繍の額装は目にすることがあるが、家事科に関する教材が確認できたのは初めての事である。制服も復元されたものが展示されていた。全体的な印象としては、戦後の資料がやや多いようであった。当日は、秘書の方が校史室を案内してくださった。資料についての説明を一通り受けた後、写真撮影の許可を得てから展示資料の撮影を行った。

## 2. 博士論文執筆における本調査の位置づけ

### 2.1 これまでの研究経過と本研究調査との関係

これまで筆者は、日本統治期台湾における高等女学校研究、特に裁縫科教育に着目して研究を進めている。修士論文では、歴史的に台湾人女子児童の教育機関として発展してきた台北州立台北第三高等女学校で行われていた裁縫や刺繍、手芸、造花といった「技芸教育」について考察を進め、その実態解明を行った<sup>8</sup>。現在進めている研究は、修士論文を更に発展させたものである。

1922年に台湾教育令が改正されたことを受け、中等教育以上では台湾人生徒と日本人生徒の共学が実施されることになり、制度上では日本人と台湾人という民族差は解消されたかのようにみえた。しかし、筆者が研究対象としている日本統治期台湾における高等女学校では、実際は一部の科目で民族による別学が行われていた。特に、裁縫科では、台湾人女子教育機関として発展してきた歴史を持つ高等女学校においては、1930年代半ばまで和裁と洋裁に加えて台湾裁縫が教えられていたが、他の高等女学校では教えられていなかったことを明らかにした。これまで、主として台北市内に設けられた台北第三高女を中心に考察を進めてきたが、考察を進めるにつれ、他校（特に地方に設けられた高等女学校）との比較が重要なのではないかと考えるようになった。

地方の高等女学校に着目する理由は、先にも触れたが、これまでの先行研究では地方の高等女学校に関する研究が進んでおらず、各高等女学校間の地域性や特色等が明らかにされていない点が多いか

らである。台湾に設けられた高等女学校の全体像を把握するためには、地方の高等女学校に目を向ける必要があるとの問題意識から、2012年に台湾中南部の現雲林県に設けられた台南州立虎尾高等女学校（現国立虎尾高級中学、以下虎尾高女と略記）を訪問した。虎尾は、大日本製糖株式会社を中心に街が形成された地域であることから、製糖会社と学校との関わり的一端を明らかにした<sup>9</sup>。地域の主たる産業の違いにより、生徒の親の職業も異なってくる。虎尾高女の場合は、その大部分が大日本製糖株式会社関連の職に親が就いていた。各学校の歴史は、沿革誌や記念誌等により確認することができるが、学校の設立経緯などについては、地域の産業等が関わりを持っていることがあるため、各地域の産業史などにも目を向ける必要があることを学んだ。実際に現地に足を運び資料調査を行い、可能な限り街を歩き、学校を取り巻く環境や各地の気候風土に触れることにより、活字や聞き書き調査からだけでは見えてこない部分を想像することが可能になる。特に、台湾人の衣生活と関わりの深い裁縫科教育を研究対象としている筆者にとっては、各地の気候風土を知ることが意義あることである。

筆者は、高等女学校に関する資料がどの程度戦後に引き継がれ保管されているのかを調査するため、2016年11月には、平成27年度お茶の水女子大学大学院生研究補助金により台中州立彰化高等女学校（現国立彰化女子高級中学）と台北州立基隆高等女学校（現国立基隆女子高級中学）、そして台北第一高女（現北一女）を訪問し、台北のみならず地方の高等女学校に関する資料調査を行った。今回の調査により、嘗て台北州に設けられ公立高等女学校6校を全て訪問することができた<sup>10</sup>。今回の調査は、お茶の水女子大学による研究補助金を得て行う第二回目として位置づけるものである。また、本調査は、学生海外派遣プログラムによるものであり、「グローバル女性リーダー育成カリキュラムに基づく教育実践と新たな女性リーダーシップ論の発信」を前提としていることから、海外に赴き現地で資料調査を行うことは、国際的な女性リーダーの育成にも関わるものであると考える。今回の経験を生かしながら、今後も積極的に現地に赴き日本統治期台湾に設けられた高等女学校に関する資料調査を継続し、日本統治期台湾に設けられた高等女学校研究を深めていきたい。

## 2.2 今後の研究計画と本調査との関係

今後の研究計画としては、本研究調査で訪問した学校を「日本統治期台湾の高等女学校訪問記（その3）」として『植民地教育史研究年報』に公表する予定である<sup>11</sup>。本調査で得られた資料類や学校が設けられた地域の特色等から、各地域に設けられた高等女学校の全体像を把握することが可能となる。これらの一次資料を元にその他の関係資料などを用いながら考察を進め、本調査によって得られた研究成果を所属している研究会や学会などで発表し、投稿論文へと繋げ、最終的には博士論文にまとめていきたいと考えている。本調査で得られた資料類は、これまで筆者が進めてきた研究の幅を広げ、博士論文を執筆する上で重要な手がかりとなり得るものであると考えている。

## 謝辞

本研究調査は、国立花蓮女子高級中学、国立蘭陽女子高級中学、台北市立第一女子高級中学の校長先生をはじめとする諸先生方、訪問に際し御尽力下さいましたご卒業生の皆様方、通訳で同行してくださった陳麗鳳先生、その他多くの方々のご協力なしには行うことができませんでした。お力添えをくださいました関係者の皆様方に心から御礼申し上げます。ありがとうございました。

## 注

1. 滝澤佳奈枝「台湾 台南市・彰化県・嘉義市・嘉義県・高等女学校」、『学校所在地一覧』、研究代表者 玉川大学教育博物館 白柳弘幸、平成23年度～平成25年度科学研究費補助金 基盤研究(B) 課題番号23330244、上巻、37-38頁、2013年
2. 植野弘子「植民地台湾における高等女学校生の『日本』—生活文化の変容に関する試論—」五十嵐真子・三尾裕子編『戦後台湾における＜日本＞』風響社、2006年、121-154頁；山本禮子『植民地台湾の高等女学校研究』多賀出版、1999年；洪郁如『近代台湾女性史』勁草書房、2001年；游鑑明『日據時期台湾的女子教育』国立台湾師範大学歴史研究所専刊(20)1988年 等
3. 『花蓮港庁立花蓮港高等女学校一覧表』昭和13年；『花蓮港庁立花蓮港高等女学校一覧表』に記載されている設立位置である花蓮港庁花蓮郡は1937年以降の行政区分であるため、1927年の設立当時のものとは異なる。
4. 陳淑美編纂『走街串巷 老花港—花蓮県2015全国古蹟日導覽手冊』花蓮県文化局、28-43頁、2015年
5. 『花蓮県花蓮市明禮国民小学』1頁（奥付がないため発行年限不明）
6. 『台北州立蘭陽高等女学校一覧表』昭和17年
7. 台湾教育会『台湾教育沿革誌』1939年（復刻 台北：南天書局、1995年）812-816頁
8. 滝澤佳奈枝『日治時期台湾的技芸教育—以第三高女為中心』淡江大学国際研究学院日本研究所修士論文、2005年
9. 滝澤佳奈枝「台南州立虎尾高等女学校と生徒たちの終戦前後—大日本製糖株式会社と学校及び生徒たちの関わりを

- 中心に一」、『旧外地の学校に関する研究—1945 年を境とする連続・非連続—』、研究代表者 玉川大学教育博物館 白柳弘幸、平成 23 年度～平成 25 年度科学研究費補助金基盤研究 (B) 課題番号 23330244、39—52 頁、2014 年
10. 台北州に設けられた公立の高等女学校 6 校のうち、台北州立台北第二高等女学校並びに台北州立台北第四高等女学校は廃校になっている。そのため、実際には、戦後に引き継がれた 4 校を訪問したことになる。
11. 台北州立台北第三高等女学校、台南州立虎尾高等女学校については、拙稿「日本統治期台湾の高等女学校訪問記 (その 1)」『植民地教育史研究年報』第 18 号 (216—222 頁、2016 年)、台中州立嘉義高等女学校、台北州立基隆高等女学校、台北州立台北第一高等女学校については「日本統治期台湾の高等女学校訪問記 (その 2)」『植民地教育史研究年報』第 19 号 (2017 年掲載予定) にて報告した。

## 参考文献

- 植野弘子「植民地台湾における高等女学校生の『日本』—生活文化の変容に関する試論—」五十嵐真子・三尾裕子編『戦後台湾における<日本>』風響社、2006 年、121—154 頁
- 山本禮子『植民地台湾の高等女学校研究』多賀出版、1999 年
- 洪郁如『近代台湾女性史』勁草書房、2001 年
- 游鑑明『日據時期台湾的女子教育』国立台湾師範大学歴史研究所専刊 (20) 1988 年
- 台湾教育会『台湾教育沿革誌』1939 年 (復刻 台北：南天書局、1995 年)
- 陳淑美編纂『走街串巷 老花港—花蓮県 2015 全国古蹟日導覽手冊』花蓮県文化局、2015 年
- 『花蓮港庁立花蓮港高等女学校一覧表』昭和 13 年
- 『台北州立蘭陽高等女学校一覧表』昭和 17 年
- 『花蓮県花蓮市明禮国民小学』(奥付がないため発行年限不明)
- 滝澤佳奈枝「台湾 台南市・彰化県・嘉義市・嘉義県・高等女学校」、『学校所在地一覧』、研究代表者 玉川大学教育博物館 白柳弘幸、平成 23 年度～平成 25 年度科学研究費補助金 基盤研究 (B) 課題番号 23330244、上巻、37—38 頁、2013 年
- 滝澤佳奈枝『日治時期台湾の技芸教育—以第三高女為中心』淡江大学国際研究学院日本研究所修士論文、2005 年
- 滝澤佳奈枝「台南州立虎尾高等女学校と生徒たちの終戦前後—大日本製糖株式会社と学校及び生徒たちの関わりを中心に—」、『旧外地の学校に関する研究—1945 年を境とする連続・非連続—』、研究代表者 玉川大学教育博物館 白柳弘幸、平成 23 年度～平成 25 年度科学研究費補助金基盤研究 (B) 課題番号 23330244、39—52 頁、2014 年
- 滝澤佳奈枝「日本統治期台湾の高等女学校訪問記 (その 1)」『植民地教育史研究年報』第 18 号、216—222 頁、2016 年
- 滝澤佳奈枝「日本統治期台湾の高等女学校訪問記 (その 2)」『植民地教育史研究年報』第 19 号 (2017 年掲載予定)

たきざわ かなえ／お茶の水女子大学大学院 人間文化創成科学研究科 人間発達科学専攻

## 指導教員によるコメント

滝澤さんは台湾の淡江大学の修士課程に留学し、修了後も引き続き植民地期の台湾の技芸教育に関する研究を続けて 2014 年に本学大学院博士課程に入学しました。技芸教育に関する学校保存資料を収集するために何度か台湾に出向いています。文書館等と違って、学校保存資料の場合は校史室があっても資料目録が作成、公開されているとは限らず、自分が見たいものだけを請求して閲覧できるわけでもありませんので、やはり学校を訪問して確認する必要があります。また、学校の地理的立地を確認することで、その学校の生徒の民族や家庭の階層・職業を把握することが可能になってきます。台湾裁縫が一部の高等女学校で教授されていたことを滝澤さんは明らかにしていますが、その傾向が台湾全体でどのようなものであったのかを確認する必要がありますので、1 校ずつ確認する作業を進めています。今回の調査でその作業が大きく前進しましたので、収集した資料を整理し、その成果を個別の論文にまとめたうえで、博士論文に集大成することが視野に入ってきたとみています。

(人間科学系 米田俊彦)

## **Document investigation on *KotoJogakko* established in the Japan Colonial Period — Around the eastern part of Taiwan —**

TAKIZAWA Kanae

The precedent study on *KotoJogakko* in the Japan Colonial Period has been conducted around big cities such as Taipei and Tainan. Therefore there are many parts which are not clarified about *KotoJogakko* established in the district. This research and investigation is the first approach to elucidate the actual situation of *KotoJogakko* established in the eastern part of Taiwan and is intended to investigate the documents kept by each school. The results provided by this research and investigation can be an important clue in pushing forward the study of *KotoJogakko* in the Japan Colonial Period.